

## 幸せな日々の形見

辻 憲男（文学部教授）

清少納言にとって、定子（ていし）中宮は唯一最高の女性であった。初めて参上した時の、袖口からちらりと見えた御手の美しかったこと。十ほど年下なのに、明朗快活なサロンの御主人様であった。枕草子の「香炉峰の雪」は少納言の得意絶頂のひとつコマ。中宮さまはただ「笑はせたまふ」た。

998年の師走半ば、大雪が降って庭に雪山を作らせた。「いつまでありなむ？」との仰せに皆が「年内」と答えたのを、少納言は「正月十五日」と言い張った。観音に祈り、丈低くなって年を越した。元日、雪が降り積もったが、中宮さまはきびしく、上のはかき集めて捨てさせた。…薄汚れ、里下がりの間に雨が降り、十四日朝には円座（わらうだ＝敷物）大になっていた。翌早朝容器を持たせたが、もう跡形もなかった。その日のために歌までつくっていたのに。中宮さまから「さて雪は今日までありつや？」とのこと。口惜しくて“だれかが憎んで取り捨てたのかも”と申し送った。

二十日に御前にて言上すると、「いみじく笑はせたまふ」。人々も笑う。“前夜に片づけさせたのよ。でもそんなに思い入れしていたとは、罰があたるわね。あなたが勝った今は、その歌とやらをおっしゃいなさい”。

いたずらだったのだ。他愛ない冗談とは言え、いたたまれなかった。「いとつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする」。大人の自信家にしてこんな目にあう。枕草子は、宮仕えの短くも幸せな日々の形見である。

降るものは雪。ほどほどが良い。「檜皮茸（ひわだぶき）いとめでたし。少し消えがたになるほど。多くは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う丸（まる）に見えたる、いとをかし」。



清少納言が住んだという東山区鳥辺野にて。  
定子陵参道は剣神社から泉涌寺に通じる道。